

文学研究科

2016（平成28）年度 文学研究科自己点検・評価報告書

1 「学習成果の可視化」に向けた取り組み

（1）現状の説明

文学研究科では「学位論文の学習成果の可視化について」として、ルーブリックによる学位論文の審査基準を『大学院要覧』で明示している。すなわち、

ア 修士論文・リサーチペーパーでは審査基準として4～8項目を設け、合計が100点となるように配点

イ 博士論文では、同じく審査基準として5～8の項目を設け、総合的に判断とした。

（2）点検・評価

1）効果が上がっている事項

審査基準を明確化したことによって、学生への指導方針、専攻・専修ごとの審査基準の統一、および文学研究科全体での統一性は改善され、審査が円滑に進むようになった。

2）改善すべき事項

ただし、いまだ実施期間が短いこともあり、幾つかの改善点がみられる。とくに、専攻・専修間の修士論文・リサーチペーパーの点数のバラつきが問題である。簡単にいえば、ある専攻では全体的に点数が高く、ある専攻では厳しいという傾向がみられる。この偏在は、奨学金授与を決める際の判断材料にも影響を与える可能性があり改善を必要とする。

（3）将来に向けた発展方策

上記指摘の事項に対しては専攻・専修間の協議が必要であるが、前述の学位論文の審査基準の明確化と明示による相互認識、およびコースワークの導入などによって合意を形成していく予定である。

（4）根拠資料

『大学院要覧』

2 認証評価結果に関する事項

ア（教育課程・教育内容）に関して、「博士後期課程においても、リサーチワークにコースワークを適切に組み合わせたカリキュラムといえないので、課程制大学院制度の趣旨に照らして、同課程にふさわしい教育内容を提供することが望まれる」と指摘された努力課題について

（1）現状の説明

文学研究科の博士後期課程には研究科全体を対象としたコースワーク科目が設置されていない。

（2）点検・評価・将来に向けた発展方策

文学研究科では、特定の担当教員による個人的な指導に過度に依存する傾向を改め、各専門分野に関する専門的知識を身に付けるための体系的な教育プログラム、幅広い視野を身に付けるための関連領域に関する教育プログラム、自立的な研究者として必要な能力や技法を身に付けるための教育プログラム、最終的に体系的な学位論文を作成することに向けて、その前提となる研究計画の作成や研究の途中

経過のまとめなど、研究過程の中間的な段階を設定し、それぞれ設定された水準を満たすことを求める仕組みづくりなどを、博士後期課程において実現できるカリキュラムの作成をめざしており、この認識は各専攻ともに共通している。

そこで、文学研究科内の全専攻から教員が参加する形で「博士後期課程コースワーク導入に関する検討委員会」を設置し、作業に入る体制を整えた。ここでは上記の課題・問題点を洗い出した上で、2017年夏ころには試案を作成する予定である。

(3) 根拠資料

『大学院要覧』

イ「教育内容・方法・成果（3）教育方法」に関して「文学研究科において、研究指導計画が策定されていないため、改善が望まれる」と指摘された努力課題について

(1) 現状の説明

文学研究科では、2016年度よりすべての学生に対する研究指導計画書を毎年、指導教員に提出することが義務づけた。研究指導計画書には、指導教員と対象学生双方の確認署名を必要としている。

(2) 点検・評価・将来に向けた発展方策

提出した学生の率は概ね80%を越えており、最低限の目標は達成されたといえよう。今後は100%を目指して趣旨を徹底する予定である。ただし、内容に関しては依然としてバラツキがあり、今後はこの点についても一定の水準を満たす研究指導計画書にふさわしいものにしていきたい。

(3) 根拠資料

『大学院要覧』

「大学院学則第24条「博士課程及び修士課程は、学生に対して、授業及び研究指導の方法及び内容並びに1年間の授業及び研究指導の計画をあらかじめ明示する」

ウ シラバスにおける授業概要、授業計画・内容、到達目標などの記載の精粗

(1) 現状の説明

2016年5月の文学研究科委員会で議題に取り上げ、本格的な検討に入った。現状のシラバスは以前と比較すればかなり改善されてきたが、確かにいまだ精粗があり、文学研究科委員会などでその改善を常に訴えている。

(2) 点検・評価・将来に向けた発展方策

大学院の場合は不開講科目も多く、また受講する学生の要望に合わせて授業計画を立てる場合もあるので、一律に事前に詳細なシラバスを作成することは困難なことが多い。しかし、学生に対する授業方針をより魅力的に明示するため、シラバスの改善が必要であることはいままでもない。そのため、この改善方法については現在、文学研究科内各専攻の自己点検委員、および前記「博士後期課程コースワーク導入に関する検討委員会」に検討を依頼する予定である。